

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520774

研究課題名(和文) 英語を学ぶ目的意識の自覚化を促進する英語プログラムの構築 - ESP 的視座から

研究課題名(英文) An ESP approach to developing English programs promoting self-awareness of students' own purposes for studying English

研究代表者

桐村 亮 (Kirimura, Ryo)

立命館大学・経済学部・准教授

研究者番号：40584090

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000 円、(間接経費) 930,000 円

研究成果の概要(和文)：学部や専攻への適応度が低く、卒業後のキャリアが不確定で、学習の目的意識を持ちにくいとされる経済系学部において、ESPの視点から、目的意識を醸成し、学部への帰属意識を高める英語プログラムの開発を目指した。1回生に帰属意識に関するアンケート調査を実施、また、「英語経済学入門」の異なるタイプの学習課題に対し学習者がどのように取り組むかを調査した。経済学の学習には、テキストから必要な情報を見つけ出すだけでなく、理解した情報を使っての分析や、設定のもとでの議論、実社会への応用など、高度で多様なタスクに取り組まなければならないが、学生たちは、英語でそれを行うには経験が不足していることがわかった。

研究成果の概要(英文)：It is pointed out students majoring in economics and commercial science are most likely to spend their college days without specific purposes or strong motivation to study. As instructors involved in developing and managing English programs for economics students, the researchers sought possibilities to help students to raise awareness of their goals of studying, to study English with specific purposes in mind, and to establish their identity as economics students. The researchers conducted questionnaire surveys to examine the sense of belongingness of the first-year students, and also conducted analyses of the students' performance on different types of exercises for the course of Introductory Economics in English as well as the questionnaires asking how they approached the coursework. The results suggest, among others, that the students need more experience in a variety of challenging productive response tasks in English, which is an essential part of studying Economics.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育 経済学 ESP EAP 教材研究 目的意識 帰属意識 学習ニーズ

1. 研究開始当初の背景

日本の英語教育において、実社会で「使える」英語力習得が追求される中、アプローチの一つとして、ESP (English for Specific Purposes) の考え方が急速に関心を集めてきた。理工系、医学・薬学系に続き、社系学部においても、特定分野を対象としたニーズ分析、ジャンル分析が行われ、その結果に基づく教材開発やコース構築、カリキュラム開発が、様々なレベルで行われつつある。しかし、帰属意識が相対的に低く、自らの将来像を具体的にイメージしにくいとされる経済学系学部の学生にとって、大学で英語を学ぶ目的・ニーズは何か。過去の研究から、経済学系においては、工学系や医学系に比して、学習場面でのニーズと卒業後の職業集団におけるニーズには大きな開きがあり、具体的な英語学習ニーズについて、教員・学生間で認識を共有することが難しいと指摘されている。また、学習者の動機づけが発達・変化する過程とメカニズムの分析からは、学習者の動機づけの特性（現在の動機づけ状態）によって、効果的な学習支援の在り方は異なることが明らかとなっている。こうした背景から、当研究者が所属する経済・経営系学部での英語教育において、学生が自らの学習目的について自覚し、その目的に応じた学習を進めることにより、専攻分野に対する帰属意識を涵養するような英語プログラムを開発する必要性を認識するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学部や専攻への適応度が低いとされる経済・経営系学部生を対象に、ESP 的アプローチに基づいた新しい英語プログラムの開発を試みることにある。具体的には、学習者の英語学習に対する「目的」意識の自覚化を促進することにより、動機づけや英語力の向上に与える影響を検証する。この実施にあたり、学習目的リストを作成し、これに準拠したシラバス、教材、到達度テストを開発する。さらに授業実践においてその効果を検証し、調査結果および授業実践結果の公表を通じて、大学英語教育の高度化・活性化の一助とする。

3. 研究の方法

(1) 経済学部生の帰属意識

経済学部 1 回生 164 名を対象に帰属意識に関する質問紙調査を実施した。質問項目は、Goodenow(1993)が論文 Psychological Sense of School Membership で実施した質問紙調査を和訳したものをもとに作成した。「入学前から経済学に興味をもっていた」、「学部を選ぶ際に、卒業後の進路のことを考えて選んだ」等、計 26 項目を「よくあてはまる」から「まったくあてはまらない」の 5 段階評価で調査した。

(2) 英語経済学における課題取組状況

まず、英語で書かれた経済学入門教科書の代表的なものを ESP の視点からジャンル分析を行い、特徴を整理した。目的、対象、情報内容、言語的特徴、その他特徴を整理した。「経済学教科書」というジャンルの特徴を明らかにし、学習者が学ぶ上で意識すべきポイントを提示することを狙いとした。

次に、経済学部 2 回生の必須科目「英語経済学入門」において、以下の二種類の学習課題に関して学生の取組結果を分析した。

内容理解を確認する選択式問題

例：Two goods are complements when a decrease in the price of one good:

A) decreases the quantity demanded of the other good. B) decreases the demand for the other good. C) increases the quantity demanded of the other good. D) increases the demand for the other good.

多様なタスクを含む記述式問題

例：Give a real world example of a case in which economists' advice is not followed. Give your reasons why the advice is not followed.

また、学期末には受講生計 180 名を対象に、学習状況に関するアンケート調査を行った。アンケートでは、授業外の平均学習時間、教科書の読み方、課題で苦労した点、TOEIC スコア等を調査した。

4. 研究成果

(1) 経済学部生の帰属意識

入学後 3 か月を過ぎた時点での調査であったが、この時点で顕著な値を示す項目は見られなかった。各項目の平均値は 5 段階の 3 近くに集中した。たとえば、「経済学部に属していることを誇りに思う」については、平均が 2.97 で、過半数が「どちらともいえない」と回答した。経済学部所属の実感がないことの表れとも言える。また、項目ごとの相関関係も特に強いものは見られなかった。ただ、将来の英語力の必要性については概ね認識をしており、この意識と経済学への関心および職業観がどう結びついていくかをより具体的に追跡する必要がある。2013 年 1 月、同じ質問紙調査を同規模で実施し、そのデータは引き続き分析中である。

(2) 英語経済学における課題取組状況

英語で書かれた経済学教科書のジャンル分析からは、一般的な語学教材との差異が多く見られた。中でも、経済学教科書の特徴として際立つ点は、想定の中で議論が展開していくこと (suppose that...、assume that... のような表現の多用) と、様々なタイプの学習課題を提供していることである。特に章末問題は、一般の語学教材とは比較にならないく

らい多様で、充実している。これらを活用し、英語で経済学を習得するときには、次の4つのタスクが重要であると判断できた。

概念や事象を読んで理解すること
対立する意見や考え方を判断・評価すること
一定の仮定のもとで議論を展開すること
学んだ概念を現実社会に応用すること

上のタスクを盛り込んだ記述式問題に対する学生の取組状況を分析すると、質問の意図を誤解していたり、(答えそのものではなく)答え方が間違っていたり、といった、(経済学の理解とは異なる)英語のコミュニケーション上の問題が明らかになった。これは、学生がこれまでに学んできた英語では、こうした具体的なアウトプットを行うために読むという経験があまりなかったことを表している。

期末アンケート(N=180)の結果を単純集計したものは、主に次のようなことがわかった。

経済学の教科書を読む際には、スキミング(88.9%が行う)やスキミング(68.0%が行う)など、これまでに学んだ読解ストラテジーを活用している。
辞書を使う、日本語に訳しながら読む、に関しては、行う者と行わない者がおよそ半数ずつに分かれており、経済学教科書を読む際にも、学習者がそれぞれ自ら好む英文読解方法を選択している。
時間外の学習時間は週79.1分。TOEICスコアの平均は525.2(標準偏差:101.6)である。

また、記述式問題(約30題、100点換算の平均点60.2点、標準偏差14.1)と選択式問題(約80問、100点換算の平均点62.6点、標準偏差17.4)の個人別結果、さらには期末アンケートのデータを組み合わせて分析した結果からは、次のようなことが明らかになった。

TOEICスコアで測った英語力は、経済学の理解を問う選択式問題と、有意な正の相関を示す一方で、記述式問題に関しては有意な相関がない。つまり、TOEICのような選択式問題で高得点を取る学生は、経済学においても、選択式問題を解くことは得意であるが、多様なタスクを含む記述式問題に関しては、必ずしも得意ではない。

英語経済学の教科書を読むときに、日本語に訳しながら読む学生は、記述式問題の正答率が有意に高い(平均65.2)が、TOEICスコアは有意に低い(平均563.2)。一方で、日本語に訳さない学生は、TOEIC

スコアが有意に高い(平均610.6)が、記述式問題は有意に低い(平均57.3)。また、訳すか訳さないかの差は、選択式問題の結果には有意な影響はない。

上の結果からは、日本語に訳しながら読む学生は、理解が深く、日本語で既に得ている経済学の知識や情報と合わせながら理解をしているために、より高度な考察やアウトプットを必要とする記述式問題に強いのではないかと推察できる。一方でTOEICのように時間的制約の中で情報をすばやく処理するようなタスクについては、英語を英語のまま処理するスタイルの方が望ましいと推察できる(test-taking strategiesの影響も考えられる)。結論づけるには更なる調査と慎重な分析が必要であるが、経済学部で英語を学ぶ際に、目的如何では、必要な英語指導法が大きくことなる可能性を示唆している。

当初予定していた教材やカリキュラムの開発については、「英語経済学入門」における教科書選定や課題設定・評価にとどまり、本調査の分析結果をより総合的な英語プログラム開発にまで落とし込むには至らなかった。これは、帰属意識調査及び課題取組状況調査の結果を精査し、さらなる調査と分析を行う必要が生じたためである。今回の研究成果を踏まえ、今後は、経済学部卒業後の職場での英語ニーズや英語使用実態を調査し、その結果を学部生の学習目的意識や帰属意識につなげる形で英語プログラムに反映させていく計画である。この研究は、今回と同じ研究者グループで、科研費助成2014年採択の基盤研究(C)「経済学部卒業生の就職先における英語使用の実態 英語を学ぶ目的意識の自覚化に向けて」(研究課題番号:2637064)において、引き続き進めていくこととする。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

著者名: 清水裕子、桐村亮、野澤健、論文標題: 経済学部英語圏短期留学プログラムにおけるスピーキング・テストの実施とその結果報告、雑誌名: 立命館高等教育研究 査読: 有 巻: 14、発行年: 2014、ページ: 91 - 102

著者名: R. Kirimura, Y. Shimizu, M. Yoshimura、論文標題: Bridging the Gap Between General English Instruction and Specific Language Needs of Economics Students in Japan、雑誌名: Proceedings at the 5th Centre for Language Studies International Conference、査読: 有、発行年: 2012、

[学会発表](計7件)

発表者名 : R. Kirimura, Y. Shimizu, M. Yoshimura、発表標題 : Need of Cultivating Sense of Belongingness in an EFL program for the Economics Students、学会等名 : International Association of Applied Linguistics (AILA)、発表年月日 : 2014年8月10日~15日、発表場所 : プリズベン (オーストラリア)

発表者名 : 桐村亮、発表標題 : 目的を意識したリーディング 経済学の入門教科書をどう読むか、学会等名 : JACET 関西支部 ESP 研究会、発表年月日 : 2014年5月17日、発表場所 : 近畿大学会館 (大阪府)

発表者名 : R. Kirimura, M. Yoshimura, Y. Shimizu、発表標題 : How Japanese Students Approach Studying Economics in English American Association of Applied Linguistics、学会等名 : American Association of Applied Linguistics、発表年月日 : 2014年3月25日、発表場所 : ポートランド (アメリカ)

発表者名 : R. Kirimura, Y. Shimizu, M. Yoshimura、発表標題 : Bridging the Gap between General English Instruction and Specific Language Needs of Economics Students in Japan、学会等名 : The Fifth CLS (Center for Language Studies) International Conference、発表年月日 : 2012年12月7日、発表場所 : シンガポール

発表者名 : R. Kirimura, M. Yoshimura、発表標題 : Language Needs of Japanese Students Studying Economics in Japan、学会等名 : 全国語学教育学会 (JALT) CUE ESP Symposium 2012、発表年月日 : 2012年9月8日、発表場所 : 奈良先端科学技術大学院大学 (奈良県)

発表者名 : R. Kirimura, Y. Shimizu、発表標題 : Sense of Belongingness of University Students Majoring in Economics、学会等名 : The 10th Hawaii International Conference on Education、発表年月日 : 2012年1月7日、発表場所 : ホノルル (アメリカ)

発表者名 : R. Kirimura, M. Yoshimura、発表標題 : Language Needs of Japanese Students Studying Economics in Japan、学会等名 : The 10th Hawaii International Conference on Education、発表年月日 : 2012年1月5日、発表場所 : ホノルル (アメリカ)

桐村 亮 (KIRIMURA RYO)
立命館大学・経済学部・准教授
研究者番号 : 40584090

(2)研究分担者

吉村 征洋 (YOSHIMURA MASAHIRO)
摂南大学・外国語学部・講師
研究者番号 : 90524471

廣森 友人 (HIROMORI TOMOHITO)
明治大学・国際日本学部・准教授
研究者番号 : 30448378

清水 裕子 (SHIMIZU YUKO)
立命館大学・経済学部・教授
研究者番号 : 60216108

6. 研究組織

(1)研究代表者